

1 開催日時 令和8年7月10日（金） 14:00～16:00

2 開催場所 大津市役所 別館2階 321会議室

3 出席者 委員 7名

（金澤委員、中根委員、音羽委員、福家委員、
香水委員、中井委員、今井委員）

事務局 6名

（川島市民部長、木元市民部次長、文化振興課：井上課長、栗山副参事、
山本学芸員、井口学芸員）

計画策定支援業務受託業者 1名

傍聴 なし

4 内 容

1) 開会

- ・部長挨拶
- ・委員・事務局紹介
- ・会長、副会長選出（会長：金澤 徹氏、副会長：中根 庸介氏）
- ・会長挨拶
- ・諮問

2) 議事

第3次大津市文化振興計画に基づく事業の進捗状況について

【第3次大津市文化振興計画に基づく事業の進捗状況について事務局から説明】

【質疑】

○委員 芸術文化団体派遣事業について、ジャンル別の実施状況に偏りはあるのか。特定のジャンルに集中しているなどの傾向があれば伺いたい。

○事務局 音楽鑑賞系が最も多く、全体の半数程度を占めている。令和7年度は、これまで依頼がなかった分野にも新たに依頼があり、登録されている20数団体のうち、依頼が全くなかった団体は2団体のみであった。完全に均等ではないものの、依頼分野には広がりが見られる。

- 委 員 依頼が全くなかったジャンルはどこか。
- 事務局 舞踊関係が少ない状況となっている。その他の団体については、昨年度に初めて依頼があったところも多い。今年度はまだ開始から 3 か月程度であり、今後、各団体に幅広く依頼が入ることを期待している。
- 委 員 主な派遣先はどのようなところか。
- 事務局 老人ホーム、公民館、自治会のほか、福祉関係や比較的規模の大きな集会等が主な派遣先である。
- 委 員 学校からの依頼はあまり多くないということか。
- 事務局 学校からの依頼は、現状ではそれほど多くない。
- 委 員 全 35 件のうち音楽分野が多いとのことであるが、登録団体の多くはアマチュアの音楽団体であるように見受けられる。どの団体がどのような場所に派遣されているのか。
- 事務局 音楽団体の中でも依頼には偏りがあり、大津管弦楽団への依頼が多い。派遣先は老人ホーム、自治会、体育館で開催される集会等、多岐にわたる。また、吹奏楽団は6団体が登録されているが、そのうち平日にも対応可能な 1 団体に依頼が集中する傾向がある。
- 委 員 平日に対応する派遣先とは、どのようなものか。
- 事務局 老人ホームや高齢者サークル等からの依頼が多い。
- 委 員 歴史博物館の利用者数が前年度から半減しているように見えるが、何か特別な理由があるのか。
- 事務局 大河ドラマ「光る君へ」に関連した企画により、一時的に利用者数が増加していたことから、その反動が影響したものと聞いている。令和 5 年度の利用者数は 72,529 人であり、同年度後半から大河ドラマ関連企画の影響が見られた。
- 委 員 芸術文化団体派遣事業について、予算規模が大きくない中で、実績として示しやすい事業であることは理解している。一方、今後この事業が主要な取組として定着すると、登録したアマチュア団体を派遣する仕組みであるため、芸術的な水準が必ずしも担保されないという課題が生じる。また、プロの出演を希望する相談があった場合、他の団体は無料で派遣されているのに、プロには費用が必要なのかという話にもなりかねない。今後も独立した事業として継続する

のか、あるいは団体と依頼者をつなぐサービスとして位置付けるのか、方向性を検討していただきたい。

○委員 ホームページの見せ方は、今後のブランディングを考える上でも重要である。サイトが開設されたこと自体は喜ばしいが、URLに「ミナエル」という名称が入っていない。現在のURLを変更するなど、名称に統一感を持たせることも考えられるのではないか。

○事務局 当初は独自ドメインを取得し、大津市ホームページとは別に単体で歴史文化情報集約サイトを構築する予定であった。しかし、実際には市ホームページ内のポータルページとして構築し、そこから各課の既存ページへ遷移する仕組みとなっている。

○委員 現在は立ち上げ直後であり、見せ方を模索している段階だと思う。入口は一定整理されているが、利用者が情報を探してページに入っても、必要な情報にたどり着けない状態が生じる可能性がある。トップページについては、大きな費用をかけなくても工夫できるのではないか。例えば、文化、クラシック等の分野別に入口を設け、さらに、アマチュアの演奏会を探したい人、愛好家同士の交流の場を探したい人、単に公演情報を探したい人など、目的に応じて情報を細分化する方法が考えられる。情報を階層化し、分かりやすく使いやすい構成にすることで、継続的な利用につながるのではないか。

○委員 歴史文化情報集約サイトのアクセス数はどれくらいか。

○事務局 現在把握している文化振興課のページへのアクセス数は40,302件である。当初は独立した歴史文化情報サイトを設け、そのサイト単独のアクセス数を集計する予定であった。しかし、実際には市ホームページ内のコンテンツとして運用しているため、当初想定した方法での集計ができず、文化振興課のページのアクセス数として示している。

○委員 一般的なウェブマーケティングの考え方に当てはめると、アクセスした人のうち、実際に内容を読む人はその一部であり、さらに役立ったと感じ、継続的に情報収集しようとする人は限られる。利用方法やサイトの作り込み、どこまで労力をかけるかも含め、文化芸術分野の広報の難しさが数字にも表れてくる。開設したサイトを活用するためには相当の工夫が必要であり、幅広い関係者からアイデアを募ることが重要である。

- 委員 サイト全体のデザインや構成を管理する担当者はいるのか。
- 事務局 文化振興課だけでなく、歴史博物館、文化財保護課等の関係課が連携して運営している。各部署の担当職員が、それぞれのページを更新することは可能である。一方で、利用者を各ページへどのように導くかというデザインや導線については課題がある。今後、庁内の連携を深めていく必要があると考えている。
- 委員 資料２の評価資料の進捗状況 １３「文化芸術情報サイトへのアクセス数」 ２４０件という数値は何を示しているのか。
- 事務局 ２４０件は、歴史文化情報集約サイトに掲載した記事数である。
- 委員 第３次計画では、掲載件数は令和８年度の目標である３０件を大幅に上回る一方で、サイトアクセス数の目標は８０,０００件とされており、その目標設定の考え方が分かりにくい。目標の設定根拠とアクセス数を増やすための取組について伺いたい。
- 事務局 この文化振興計画を策定した約５年前は、現在の「ミナエル」に相当する歴史文化情報集約サイトを、独立したサイトとして構築することを前提としていた。８０,０００アクセスという目標も、独立サイトを構築した場合を想定して設定したものである。しかし、実際には、大津市ホームページ内でサイトを作成し、運用することとなったため、当初とはアクセス数の集計方法が異なっている。独立サイトとしてのアクセス数を集計できないことから、現在は文化振興課のページのアクセス数４０,３０２件を実績として示している。継続的にサイトを閲覧してもらうためには、各事業の情報をリアルタイムに掲載することに加え、利用者が自分の関心分野以外の情報にも触れられるような仕掛けも必要である。文化財保護課や歴史博物館等と連携し、発信方法やデザイン等も含めて検討していきたい。
- 委員 データは分析の基本である。部局間でデータの取得方法や管理方法が連携されていないと、分析が難しくなる。その点も整理することで、今後の取組につなげやすくなると思う。

第４次大津市文化振興計画策定のスケジュール及び方針について

【第４次大津市文化振興計画策定のスケジュール及び方針についてについて事務局から説明】

【質疑】

○委員 三井寺は、歴史博物館や伝統芸能会館等が近接し、文化に親しみやすい環境が整っている。長等小学校では約30年にわたり6年生が伝統芸能会館で狂言を発表しており、地域の文化活動の好例となっている。中学校の吹奏楽部等も発表の場を求めており、地域の文化祭や夏祭りでは、子どもたちの出演が催しの活性化にもつながっている。既存の施設や環境を生かしながら、文化活動の発表機会をさらに充実させてはどうか。

○事務局 発表機会の確保については、本計画においても重要なテーマの一つと考えている。発表の場に対して行政がどのような支援ができるのかについて、国や県の動向も踏まえながら検討していきたい。

○委員 文化事業への参加を考える上で、移動手段の不足が大きな課題である。市内の一定地域内では移動できても、地域間や市外への移動が分断されているように感じる。特に、高齢になり運転免許を返納した後は、文化イベントに参加したくても交通手段がなくなる。文化を広げ、地域間交流を進めるためにも、公共交通の充実が必要ではないか。

○事務局 交通の問題は、今回の文化振興計画だけで対応するには範囲が広い。大津市でも交通部門が事業者や県と連携し、コミュニティバス等の施策を進めている。県レベルでの議論が必要な事項ではあるが、文化振興に関わる部分については、関係部局とも連携しながら検討していきたい。

○委員 文化団体同士の連携や連絡の仕組みが全くないわけではないが、実際には情報が届かない。自身も日本舞踊の活動をしているが、地域の文化祭等への出演依頼がほとんどない。発表の機会や出演者に関する情報を、団体と地域の双方につなぐ仕組みが必要ではないか

○委員 その点については、歴史文化情報集約サイト「ミナエル」のようなサイトが有効に機能する可能性がある。出演や発表の場を求める団体に対して、対応できる内容、条件、必要経費等をホームページ等で明確に示すことも一つの方策である。例えば、「この内容であれば、この条件で出演できる」「一定の費用が必要である」と分かるようにしておけば、依頼者との調整もしやすくなる。分野別に団体情報や出演条件を集約し、発表の場を求める側と出演者を求める側をつなぐことができれば、情報集約サイトの有効な活用方法になると考える。

○委員 県の文化振興方針に部活動の地域移行が盛り込まれているが、これは本来、文化振興施策というより教育現場が抱える課題であり、教育行政として整理すべきものではないか。一方で、部活動の地域移行を進めるのであれば、大型楽器を集約して保管し、輸送手段も確保するなど、市町単位で音楽活動を支える設備や仕組みを整えることも考えられる。ただし、地域移行については関係者の考え方がさまざまであり、全国的にも調整が難しい課題となっている。

○委員 第3次計画では、地域の伝統的な食文化を継承する取組が手薄であるように感じる。鮎ずしやえび豆など琵琶湖の食文化は観光資源としても重要であるが、作り方を知る人が減少しており、継承が課題となっている。郷土料理を実際に作り、家庭で受け継ぐ機会や、調理方法の記録・保存など、第4次計画に食文化の継承につながる取組を位置付けていただきたい。

○事務局 第4次計画では、基本目標1の「豊かな歴史文化資源の調査研究と保存・活用」において、生活文化・食文化の調査研究と価値の明確化を位置付けている。第4次計画においても、歴史文化資源の保存・継承と活用・発信の中に、食文化を位置付けることを検討したい。

○委員 第4次計画策定のポイントとして「人づくり」が挙げられているが、滋賀県の文化振興施策にも同様の内容がある。県と市が同じ事業を個別に行うと、重複や無駄が生じる可能性がある。例えば、子どもの文化活動について、滋賀県は「ホールの子」事業などを通じ、県内全域を対象とした取組を実施している。県に任せる部分と、大津市が地域に密着して取り組む部分を整理し、県や他市町と連携する体制が必要ではないか。県立施設等も有効に活用していただきたい。

○事務局 県との連携は課題の一つであり、県文化振興課とは定期的に意見交換を行っている。第3次計画の事業としても、県と共同で「障害者等の文化芸術活動を支える拠点づくり事業」を実施している。今後も県と市の取組が重複することのないよう連携を図り、それぞれの役割を生かした事業展開に努めていきたい。

○委員 子育て世代にも、大津の郷土料理や食文化を知り、体験する機会が必要である。また、若い世代は大津絵や近江神宮等について名称は知っていても、由来や背景まで理解していない場合が多い。講演を聞くだけでなく、親子で参加できる体験型の文化事業を充実させていただきたい。また、各地域特有の身近な

歴史文化を積極的に発信する機会も設けていただきたい。あわせて、海外から大津市を訪れる人も増えていることから、異文化交流も計画に位置付けてはどうか。

○委員 琵琶湖文化館が整備されることで、大津市がどのように関わり、市内の文化施設の利用増加につなげていくのか。施設ができるだけでなく、歴史博物館等との連携をどのように進めるのか伺いたい。

○事務局 展示、保存等の文化財行政については、県と歴史博物館が既に意見交換を行っている。新施設には、展示機能だけでなく、文化財を保管する大規模なバックヤード機能も整備されると聞いている。また、施設内に観光案内カウンターを設け、地域振興や文化振興も担いたいとの県の意向が示されている。ハード面については徐々に内容が明らかになっているが、ソフト面については県担当課との協議段階である。今後、連携講座や連携展示等を検討し、具体的な取組をまとめていきたい。

○委員 第4次計画では、計画終了時の評価を見据え、実態に即した数値目標を設定する必要がある。少子化や人口減少を踏まえると、入場者数や作品数だけでなく、公演・展示等の実施件数や発表機会、ホールの稼働日数なども指標として検討すべきではないか。また、歴史文化資源の活用や担い手不足など、多くの課題に共通するのは広報である。インターネットだけでなく、ポスター等のアナログな広報手段も重要であるが、文化事業のポスターを掲示できる場所が少ないため、文化活動を行う人が活用しやすい広報の仕組みを整えていただきたい。

○事務局 文化に限らず、地域活動等のポスターを掲示できる場所については、都市計画部門が申請を受け付け、掲示する仕組みを設けていた。以前は設置されていた掲示板が現在はなくなっている場所もあるが、現時点で今後の方針をお答えすることは難しい。

○委員 大津市内でも地域によっては掲示場所がほとんどなく、催しの情報が目に触れない。インターネットによる発信が中心になっていることも影響しているかもしれないが、アナログな情報発信の場も必要である。

○委員 文化が根付いている国や地域では、公園や緑地等に文化情報を発信する掲示板やポスター掲示スペースが整備されている。大津市においても、文化活動を行

う団体が情報発信しやすいよう、掲示場所の確保やアナログな広報手段の充実について検討していただきたい。

その他：「文学のまち大津」ブランディング事業について

【「文学のまち大津」ブランディング事業について事務局から説明】

【質疑】

○委員 将来的に「文学のまち大津」としてどうあるべきか、目指す姿が描けていないと方向性が不明確になる。文学に特化した取組も重要であるが、音楽や食文化など他分野とのコラボレーションを取り入れることで、より多くの人に関心を持ってもらえるのではないかな。

○事務局 今年10月に開催予定の「湖都の葉マルシェ」では、大津ジャズフェスティバルと連携した取組を予定している。ユネスコ創造都市ネットワークにおいても、多分野との連携は重要な考え方であり、文学に関心のない人にも広げられるよう、他分野との連携を進めていきたい。

○委員 予算が限られる中、様々な分野に手を広げ過ぎると、結果として何も残らない可能性がある。ブランディング事業として成功を目指すのであれば、まずはターゲットを絞り、重点的に取り組むことが重要ではないか。市民が文化資源に誇りを持つという方向性は理解できるが、何をブランドとして打ち出すのかが見えにくい。目指す姿をもう少し明確にする必要があるのではないかな。

○事務局 ブランディングの捉え方は様々であり、目指すべき姿についても、関係者間で十分な議論が必要であると認識している。推進協議会での意見を踏まえながら、方向性を整理していきたい。

○委員 大河ドラマ「光る君へ」により、紫式部と大津との関係が広く知られるようになった。また、「成瀬は天下を取りにいく」のような現代作品も大変注目されている。一方で、「文学のまち大津」として何を中心に発信するのかが分かりにくく、テーマがややぼやけている印象を受ける。

○事務局 マーケティングの観点では、ターゲットを絞る考え方もあるが、本事業は誘客だけを目的としたものではない。市民が文学資源に誇りを持ち、文学に親しむまちづくりや、文学に関わる活動を継続する人々への支援も重要な目的である。行政が主体となるのではなく、これまで活動してきた市民や団体が主体と

なる取組を支えながら、事業を進めていきたい。

○委 員 文学を幅広く捉え、それを様々な取組につなげていくという理解でよいか。

○事務局 短期的な取組ではなく、大津市として文学を重点分野として継続的に取り組んでいきたいと考えている。紫式部だけでなく、百人一首、万葉集、松尾芭蕉など、多様な文学資源があるにもかかわらず、市民への認知は十分とは言えない。こうした文学資源を市民が誇れるような地域づくりにつなげたい。

○委 員 現在は観光施策として文学を活用する印象が強い。

○事務局 観光誘客につながる側面も否定するものではない。また、ユネスコ創造都市ネットワークでは、音楽や工芸、映画など他分野との連携も求められており、文学分野として登録された後も、多分野との連携を進めていく必要がある。一方で、地域の人が自らのまちを誇り、その魅力を発信できることが、結果として誘客にもつながると考えている。今後も様々な意見を踏まえながら、ブランディングの方向性を整理していきたい。

3) 閉会